

箸

伊藤左千夫

青空文庫

朝霧あさぎりがうすらいでくる。庭の槐えんじゆからかすかに日光がもれる。
 主人しゆじんは巻まきたばこをくゆらしながら、障子しょうじをあけ放はなして庭を
 ながめている。槐えんじゆの下の大きな水鉢みずばちには、すいれんが水面すいめんに
 すきまもないくらい、丸まるい葉はを浮うけて花が一輪りんさ咲さいてる。うす紅くれな
 というよりは、そのうす紅くれな色が、いつそう細こまかに溶よう解かいして、た
 だうすら赤いにおいといったような淡あわあわしい花である。主人は、
 花に見とれてうつつなくながめいつている。

庭の木戸きどをおして細君さいくんが顔をだした。細君は年とし三十五、六、

色の浅黒い、顔がまえのしつかりとした、氣むつかしそうな人である。

「ねいあなた、大島の若衆が乳しぼりをつれてきてくれましたがね」

こういって、細君は庭にはいつてくる。主人はゆるやかに細君に目をくれたが、たちまちけわしい声でどなった。

「そんなひよりげたで庭へはいっちやいかん、雨あがりの庭をふみくずしてしまうじゃないか。どうも無作法なやつじゃないか、こら、いかんというに……」

主人のどなりと細君の足とはほとんど並行したので、主人は舌うちして細君をながめたが、細君は、主人の小言に顔の色も動

かきず、あえてまたいいわけもいわない。ただにわかには足をうかすようなあるきかたをして縁先へきてしまった。

げたのあとには、ずいぶん目だつて庭に傷つけたけれど、主人はふたたび小言はいわなかつた。主人は、平生自分の神経過敏から、らちもないことに腹をたてることを、自分の損だと考えてる人である。いま細君にたいする小言のしりを結ばずにしまったことを、ふとおのれに勝ちえたように思いついて、すいれんのこととも忘れ、庭を損じたことも忘れて、笑顔を細君にむけた。

細君は下女をよんで、自分のひよりげたを駒げたにとりかえさして、縁端へ腰をかけた。そうしてげたのあとを消してくれ、と下女に命じた。

細君は、主人からある場合ばあいになにほどなられても、たいてい
 のことでは腹はらをたてたり、反抗はんこうしたりせぬ。それはあながち主し
 人の小言こごごとになれたからというのでもなく、主人を恐れおそないから
 というのでもない。細君は主人の小言を根ねのある小言か根のない
 小言かを、よく直覚ちよっかくてき的に判断はんだんして、根のない小言と思つた
 ときは、なんといわれたつてけつして主人にさからうようなこと
 はせぬ。

主人は細君をそれほど重んおもじてはいないが、ただ以いじ上しようの点てんを
 おおいに敬けいしている。

「おまえは、とくな性しやうだ」

とほめてる。細君も笑つて、

「とくな性しやうではありませんよ、はじめから損そんをあきらめてるから、とくのように見えるのでしよう」という。

世間せけんには、ちよつとしたはずみで夫おつとから打たれても、それをいっつこう心にもとめず、打たれたあとからすぐ夫と仲なかよく話をする女がいくらかもあるから、これは女性じよせいの特有性とくゆうせいかもしれぬ。妻つまなどはそれをすこしうまく発達はつたつしたものであろうと、主人は考えている。

そう考えてみると、自分が妻にたいしてわずかのことに大声おほこゑたててどなるのは、いささかきまりがわるくなる。それで近きん来らい主人しゆじんは、ある場合ばあいにどなることはどなつても、きょうのようにしりを結むすばぬことがおおいのだ。

乳ちちしぼりというのは、五十ばかりの赤あから顔がおな、がんじょうな、人に会あつてもただ頭をたてにすこし動かすだけで、めつたに口をきかない。それでどうかすると大きな茶目ちやめを見はつて人を見る。たいていの女であつたら、気味きみわるがつて顔をそむけそうな、すこぶる人好ひとずきのわるい男だ。

つれてきた若わか衆しゆうの話によると、乳ちちしぼりは非ひ常じゆうにじょうずで朝おきるにも、とけいさえまかしておけば、一年にも二年にも一ひと朝あさ時間をたがえるようなことはない。ただすこし頭ちゆうの調てう子が人なみでないから、どうもこれまで一しよか所しよに長くいられなかつたが、ご主人しゆじんのほうで、すこしその気質きしつをのみこんでいて使つてくだされば、それはそれはりっぱな乳しぼりだ、こちらの

だんなならきつとうまく使つてくださるにちがいない、ほんにん本人も
 そういつてあがつたというのであつた。

さいくん細君は、こうひととおり話しおわつてから、

「わたしはどうも、あまり好このましくないけれど、乳ちちしぼりもなく
 てはじつにこまるから、おいてみましようねえ」

とつけくわえた。主人も聞いてみると、すこしはうわさに聞いた
 ことのある、花はな前まへという男だ。変へん人じんで手におえないとも、じ
 つはかわいいそんな人間だともいわれて、府ふ下かの牛ぎ乳ゆう屋やをわた
 っていた乳ちちしぼりである。主人はしばらく考えたのち、

「それはうわさに聞いたことのある変へん人じんの乳ちちしぼりだ。朝おき
 るのがたしかで乳しぼりがじょうずなら、使つてみようじやねい

か。うまくいかぬことがあつたら、それはそのときのこととして、とにかくおいでみるさ」

細君さいくんも不安ふあんなりに同意どういして、その乳しぼりをおいでやること

になった。牛舎ぎゅうしゃのほうでは親牛おやうしと子牛こやうしとを引ひき分わけて運うんど

動場うじようにだしたから、親牛も子牛もともによびあつて鳴ないてる。

二、三日そとぶり外そとへだされた乳牛にゅうぎゅうは、よろこんでしきりに運動

場をとびまわる。

せんたくもの

洗濯物せんたくものに気をとられてる細君の目には、雨あがりのうるおつ

た庭のおもむきも、すいれんのうるわしい花もいっこう問題にはならない。

「それじゃそう」

との一言ごんをのこして、また木戸きどから細君はでていった。

二

昼乳ひるちちをしぼる刻限こくげんになった。女が若衆わかしゆうをおこす。細君は花前はなまえにひととおりのさしずをしてくださいというてきた。ほかのふたりの若いわかものは運動場の乳牛にゆうぎゆうを入れにかかるとはり板いたをふみたてる牛の足音がバタバタこんごう混合して聞こえる。主人も牛ぎゆう舎しやへでた。乳牛にゆうぎゆうはそれぞれ馬塞ませにはいつて、ひとりは掃除そうじにかかる、ひとりひとりは飼かい葉はにかかるとはり。主人はここではじめて花前はなまえに会あった。

五十になつてもしりのおちつかない、落^おちぶれはてた花前は、さだめてそぼろなふうをしているかと思ひのほか、髪^{かみ}をみじかく刈^かり、ひげをきれいにそつて、ズボンにチヨツキもややあかぬけのしたのを着^きてる。白いシャツをひじまでまくり、天竺^{てんじく}もめんのまつ白い前掛^{まえか}けして、かいがいしい身^みごしらえだ。

主人はまずそれがおおいに気持ちよかつた。花前は主人に對^{たい}しても、ただ例^{れい}のごとくちよつと頭をさげたばかりである。かえつて主人のほうからしたしくことばをかけた。

「花前^{はなまえ}、おまえのうわさはちよいちよい聞^きいていたよ、こんどよくきてくれた、なにぶん頼^{たの}むぞ」

花前^{はなまえ}は、はいともいわない、わずかに目であいさつしてゐる。

主人は家の習しゅう慣かんとだいたいの順じゆん序じよとをつげて、これだけの仕事しごとはおまえにまかせるからと命めいじた。

花前は、耳みみで合点がてんしたともいうべきふうをして仕事しごとにかかる。片手かたてにしぼりバケツと腰掛こしかけとを持ち、片手かたてに乳房ちぶさを洗あらうべき湯ゆをくんで、じきにしぼりにかかる。花前もここでは、

「どれとどれをしぼるのですか」

と主人に聞いた。

主人はこれとこれと、つきつき数かずえてつごう十余頭よとうが乳ちちのである。それからこの西側にしがわから三つめの黒白くわくぱくまだらが足をあげることから、飼かい葉はをやっておいて、しぼらねばいかぬとつける。花前はそういう下から、すぐはじめの赤牛せきうからしぼりにかかった。

花前の乳しぼる姿勢しせいははなはだ氣にいった。

左の足を乳にゆうぎゆう牛の胸むねあたりまでさし入れ、かぎの手に折おった

右足のひぎにバケツを持たせて、肩かたを乳にゆうぎゆう牛のわき腹ばらにつけ、

手も動かずからだも動かず、乳にゆうじゆう汁たきは滝たきのようにバケツにほと

ぼしる。五分間ばかりで四升しやうあまりの乳をしぼった。しぼった乳ちち

は、高くもりあがったあわが雪のように白く、毛のさきほどのほ

こりもない。主人はおぼえずみごとな腕うでまえ前まえだと嘆たんし称しょうした。

乳を受け取うとつて濾こしにかけた細君も、きれの上にはほこりがない

のにおどろいて、

「なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ」

と主人のところへ顔をだしてほめる。

花前は色も動きはしない。もとより一言ものをいうのでない。
 主人や細君とはなんらの交渉もないふうで、つぎの黒白
 まだらの牛にかかった。主人は兼吉をよんで、いましぼるから
 この牛に飼葉をやれと命じた。花前はしぼりバケツを左に持
 ちながら、右手で乳牛の肩のへんをなでて、バアバアとやさ
 しく二、三度声をかける。

乳牛はすこしがたがた四肢を動かしたが、飼葉をえて一心に
 食いはじめる。花前は、いささか戒心の態度をとってしぼりは
 じめた。じゅうぶん心得ている花前は、なんの苦もなくはね牛
 の乳をしぼってしまった。主人は安心すると同時に、つくづく
 花前の容貌風采を注視して、一種の感じを禁じえなかつた。

その毅然きぜんとして、なにかかたく信ずるところあるがごとき花前は、その技わざにおいてもじつに神かみに達たつしている。しかるにもかかわらず、人に使われてるのみならず、おちついて使われている主人をすうえられないかと思うと、そこに大なる矛盾むじゆんを思わぬわけにいかない。

見るところ、花前は、ほとんど口をきく必要ひつようのないまで、自分の思うとおりを直ちよつこう行ぎやうするほか、なんの考えるところもないらしい。こう思うと、われわれの平生へいぜいは、ただ方便ほうべんを主しゆとすることばかりおおくて、かえつてこの花前に気恥きはずかしいような感じもする。

花前はかえつて人のいつわりおおきにあきれて、ほとんど世人せじん

を眼がんちゆう 中ちゆうにおかなく、心しんちゆう 中ちゆうに自分らをまで侮蔑ぶべつしつくして
 るのじやないかとも思われる。さりとしてまた、五十になる身みを人
 にたくして、とんと人と交こうしゆう 渉しやうしえない、世にもあわれな人間
 とも思われる。

主人が妄想もうそうに落おちて、いたずらに立てるあいだに、花前は二
 頭とう三頭とちやくちやくしぼり進すすむ。かれは毅然きぜんたる態度たいどでそのな
 すべきことをなしつつある。花前は一面めんあわれむべき人間には相そ
 違ちがひないが、主人も花前を見るにつけ、みずからかえりみると、確か
 信しんなきわが生活の、精せい神しん上じゆうにその日暮ひぐらしである恥はずかし
 さをうち消すことができなかつた。

「だんな、くそがはねますよ、すこしどうかこつちへきてください

い」

そういう兼吉かねきちは、もはや飼かい葉ばをすませて、おぼいれ板いたの掃除そうじにかかったのだ。うまやぼうきに力を入れ、糞ふん尿によう相混あいこんじた汚物おぶつを下へ下へとはきおろしてきたのである。

「湯ゆが煮にたつたから、ふすまをかいておくれ、兼吉かねきち」

流ながし場ばから細君こがの声で兼吉はほうきをおいて走つていく。五郎はまぐさをいっせいに乳牛にゅうにふりまく。十七、八頭の乳牛は一時じに騷そうぜん然ぜんとして草をあらそいはむ。そのあいだにも花前はなまへはすこしでも、わが行こうい為いの緊きんちよう張ちやうをゆるめない。やがて主人しゅじんは奥おくに客きやくがあるというので牛舎ぎゅうしやをでた。

その夜の晩餐ばんさんのときに、細君はそろそろこぼしはじめた。

「ねいあなた、人なみでない、主人からもをいわれても、なるべくは返事へんじもしたくないというふうですからねえ、あれでどうでしょうかねえ」

「うむ、変人へんじんだと承知しょうちでおいてみるのだから、いまからこぼすのはまだ早い、とにかく十日かか二十日も使ってみんことにはわかりやせんじやないか」

「そりやそうですけれど」

「えいさ、変人へんじんのなりがわかりさえすりや、その変人なりに使
つてやる道があるだろう」

話もそれでおわりになったが、主人しゅじんはこの花前はなまえのことにつ
いて考えることに興味きょうみを持つてきた。その夜もいろいろと考え
た。

かれははじめから変人ではなかつたろう。かれがあんなになる
については、かならず容易よういならぬ経歴けいれきがあつたにちがいない。
それがわかれば、いつそうかれが今日こんにちの状じょうたい態たいに興味きょうみがふ
かいだろうけれど、わからぬものはしかたがないとして、きょう
見ただけでもかれは興味きょうみある変人だ。かれが顔色とかれが風ふうさき
采さいとに見るもかれがはじめから狂愚きやうぐでないことはわかる。

かれが行動こうどうの確信かくしんあるがごとくにして、その確信かくしんの底そこが
 ぬけているところ、かれが変人たるゆえんではあるが、しかしな
 がらかれは確信かくしんという自覚じかくがあるかどうか、確信の自覚がない
 のに底ぬけを気づくべきはずのないのはあたりまえだ。おそらく
 かれには確信という意識いしきはないにちがいない。確信も意識もない
 にしても、かれの実行動じつこうどうは緊張きんちようした精神をもつて毅然きぜんちよう
 直行こうしている。その脈絡みやくらくのていどや統一とういつの範圍はんいは、もう
 すこしたつてみねばわからぬが、とにかく一部の脈絡みやくらくと統一とういつ
 一とはじゆうぶんみとめることができる。みような変人があつ
 たものだ。

なにひとつ人にすぐれたことのない人間にんげんからみると、ああい

う人間のほうがたしかにおもしろい。あまりよく他たと調和ちやうわする人間にろくなやつはないけれど、そのろくでもないやつのほうが、この世の中ではたいてい幸福こうふくであるのがおかしい。

自分と花はな前まへとをくらべて考えるとおもしろい対たい照しょうができて、

る。われわれは問題の大小を識別しきべつして、いつでも小問題をごま

かしているが、花前はなまへは問題の大小などという考えがはじめからなく

て、なにごとにもごまかすことが絶対ぜつたいにできない。であるからわ

れわれは、近い左右前後さゆうぜんごはいつでもあいまいであるけれど、遠い

前後ひろと広い周圀しゆういには、やや脈絡みやくらくと統一とういつがある。花前はなまへにな

ると、それが反対はんたいになって、近い左右前後さゆうぜんごはいつでも明瞭めいりやう

であつて、遠い前後や広い周圀しゆういはまるで暗くらやみである。

まずちよつとこんなふうさべつに差別されるようだが、近い周囲をあ
 いまいにして世よに処しよするといふことが、けつしてほこるべきこと
 ではなからう。結けつきよく局主人は、花前に学まなぶところがおいなど
 考えた。

そのよく朝であつた。細さいくん君はたばこ盆ぼんに長いきせるを持ちそ
 えて、主人の居間いまにはいつてきた。

「花前は保証人ほしやうにんがあるでしようか、なんでも大島おおしまの若衆わかしゆう
 の話では、親類しんるいも身内みうちもないひとりものだといふことですから、
 保証人はないかもしれせんよ」

「うむ」

「金銭きんせんに關係かんけいしないから、そのほうはなんですけれど、病氣

にでもかかったらこまりやしませんかねえ」

「そうさな、保証人ほしょうにんのあるにましたことはないが……じやちよ

つと花前はなまえをよんでみる」

細君さいくんは下女げじよに命じて花前をよばせる。まもなくかれはズボン

チヨツキのござっぱりしたふうで唐紙からかみの外そとへすわった。例れいのご

とく軽く黙礼もくれいしただけで、もとよりものをいわずよそ見をして

いる。花前の顔色には不安ふあんもなければ安心あんしんもない。主人は無意むい

職しきに色をやわらげてことば軽く、

「花前、おまえ保証人ほしょうにんはあるかね」

「ありません」

花前は、よどみなく決然けつぜんと答えて平気へいきでいる。話のしりを結むす

ばないことになれてる主人も、ただありませんと聞いたばかりではこまった。なみのものであれば、すぐにそれでおまえどうする気かと問といかえすにきまつてるけれど、変へんじん人を見とめている花前にそういつてもしかたがないから、

「うん、そうか」

といったまま、しばらく黙もくしている。細君はじれ気味ぎみに、

「おまえずいぶん長いあいだ東京にいらつというに、懇意こんいの人もないのかね」

花前はちよつと目を細君にむけたが、くちびるは動かない。これは細君の問といがおかしいのだ。変人でおつた人間に懇意こんいな人があるかでもあるまい。主人はしかたがなく、

「まあえいや、そんなことあとの話にしよう、えいや花前」

「保証人がなくていけなければ帰りますかえ」

「いや、帰られてはこまる、えいから花前やってくれや、じゃこうしよう、おれが保証人になることにしよう、だからやってくれや」

細君は、目をぱちつかせて主人の顔を見る。

主人は目で細君を制せいす。勝手かってで子どもが泣なきたつたので細君は去さつた。花前もつづいて立ちかけたのをふたたび座ざになおつて、

「この国で生うまれた人間ですから、つまりはこの国のやつかになつてもしかたありません」

主人はきつと花前を見おろした。果然かぜん、花前にはなにか信念しんねん

があるなと思った。それでさらにおだやかに、

「そうだとも、それでおまえの精神せいしんはわかった、それで、おれがおまえの保証人になるから、おまえ安心してやってくれ、まだひるち昼ひる乳ちまでにはすこし休やすむまがあるから休んでくれ」

こういわれて花前は、それに答こたえることばなく立った。花前は保証人になる人がないのではない。自分のようなものは、いよいよ働けなくなれば、個人こじんが世話せわするよりは国家こっかが世話すべきだと思ってるらしい。それならば考えのすじはたっている主人は思った。主人はうしろ姿すがたを見送みおくつて、この変人いよいよおもしろいなと思った。

四

それから五、六日たった。花前の働きぶりはほとんど水車すいしやの
 回かいてん転とちがわれない。時間じかんの順じゆんじよ序しよといい、仕事しごとの進しんこう行こうとい
 い、いかにも機き械かいてき的てきである。余よ分ぶんなことはすこしもしないかわ
 りに、なすべきことはちよつとのゆるみもない。細君はやや安心
 して、結けつきよく局よくよい乳しぼりだと思つた。
 ところが花前はなまえの評ひようばん判ばんは、若わか衆しゆうのほうからも台だい所どころ
 のほうからもさかんにおこつた。花前は、いままでに一度どもふた
 りの朋輩ほうばいと口をきかない。自分自分は一分ぶんもちがわず時間どおり
 おきるが、けつして朋輩ほうばいをおこさない。それでいまだに一度も

笑わらつたこともない。したがって人がどんなことしようと、それにいつこう頓とん着ちやくもせぬ。自分は自分だけのことをして、さつさとあがってしまう。

そうかといって、花前さんちよつとこれこれしてくれといえ、それにさからいもしない。自分のからだにだけは非ひ常じように潔けつ癖ぺきであつて、シャツとか前掛まえかけとかいうものは毎日洗あらつてゐる。

主しゆ人じんは笑つて、それだけのことならばしごくけつこうじやないかという。

台所のうわさはまたおもしろい。下女げじよはだいいちに花前さんはえい人だという。変へん人じんだといつてばかにするのはかわいそうだという。ご飯はんだといわなければ、けつして食くいにこない。

一日二日まえ、下女がうつかりしてよぶのを忘れたら、ついに飯を食いめしにこなかつた。若衆わかしゅうはすましたことと思つてさそわなかつたとか。下女が夜おそくふと気づいて、聞きにいったら、まだ食わなかつたそうで、それから食たいにきた。

下女はとんだことをしたと悔くやんでいた。花前が食しょくじ事も水すいし車やてき的てきでいつもおなじような順じゆん序じよをとる。自分のときめた飯めし碗わんと汁碗しるわんとは、かならず番ばんごと自分で洗せんつて飯めしを食たべる。白いふきんと象牙ぞうげのはしとをだいにじに持つておつて、それは人に手をつけさせない。この象牙ぞうげのはしにはだれもおどろいてる。ややたいらめな質しつのもつとも優等ゆうとうな象牙ぞうげで、金時きんまきえ絵がしてある。細君さいくんなどは見たこともないものだといっている。下女の話によ

ると、下女が花前さんのおはしはじつにりっぱなものですねえ、なにかいわくのありそうなはしじやありませんかというど、しるりと笑うそうだ。

下女は花前さんを笑わせるにや、はしをほめるにかぎるといつて笑っている。

しかし細君や子どもたちは、変人へんじんとはいえ、花前がいかにもきちんとした顔をしているので、いたずら半分はんぶんにはしのことを問うてみるようなことは得えしない。細君はどういうものか、いまだに花前を気味きみわるくばかり思つて、かわいそうという心持こころもちになれぬらしい。

主人は以上いじょうの話わを総合そうごうしてみ、残酷ざんこくな悲惨ひさんな印象いんしょう

を自分の脳裏のうりに禁きんじえない。精神病者せいしんびようしゃに相違そういないけれど、花は前なまえが人間ちゆうの廢物はいぶつでないことは、畜牛ちくぎゆういつさいのこ
とを弁べんじて、ほとんどさしつかえなきのみならず、ある点てんには、
なみの人のおよばぬことをしている。いつかのようにならぬ、この国で
生まれた人間ですからというような調子ちようしに、人世上じんせいじようのこと
になんらか考えてやしまいか。人世問題じんせいもんだいになんらかの考えが
あつて、いまの境遇きようぐうにありとせば、いよいよ悲惨ひさんな運命うんめいで
ある。

こう考える主人は、ときどきそれとなく奥へ招まねいで茶菓ちやかなどを
あたえ、種々しゆじゆわ会話をこころみるけれど、かれが心面しんめんになんら
のひびきを見いだしえない。なにを問とうても、かれは、はあとい

うきりで、なんらの語もつづらない。主人は百方意をつくして、この国で生まれた人間ですからというような糸口を引きだそうとこころみだが、いつでも失敗におわつた。かれは主人に對したときにも、ときをきらわず立つてしまふ。

あるときはその象牙のはしから話しかけてみると、なるほど下女のいうごとく、かれががんじような顔にしろりと笑いを動かし、た。しかしこれも笑うたきりで、それ以上には、なんの話もせぬ。依然たる前後の暗黒であつた。

そのように花前は、絶対にほかに交渉しえないけれど、周圀はしだいにその変人をのみこみ、変人になれて、石塊を綿につつんだごとく、無交渉なりに交渉ができてゐる。

かくて数月をぶじにすごした。

五

人との交渉には、感情絶無な花前も、ふしぎと牛はだいに
 にする。愛してだいにするのか、運動の習慣でだいにす
 るのか、いささか分明を欠くのだが、とにかく牛をだいにす
 ることはひととおりでない。それに規則的にしかも仕事は熟
 練してるから、花前がきてから二か月にして、牛舎は一
 変した観がある、主人はもはやじゅうぶんに花前の変人なりを
 のみこんでるから、すべてつごうよくはこぶのであった。

水車すいしやの運動はことなき平生へいぜいには、きわめて円滑えんかつにゆくけれど、なにかすこしでも輪わの回転かいてんにふれるものがあると、いささかの故障こしょうが全部ぜんぶの働きをやぶるのである。

主人は読書どくしょにあいて庭に運動した。秋草もまったく朽ちつくして、わずかにけいとうと野菊のぎくの花がのこっているばかりである。主人は熱ねつした頭を冷氣れいきにさらしてしばらくたたずんでおつた。露つゆゆしも霜しもに痛いためられて、さびにさびたのこりの草花に、いいがたきあわれを感じて、主人はなんとなし悲かなしくなつた。

こういうときには、みようにものに驚おどろきやすい、主人は耳をそばだてて、牛舎ぎゆうしやに荒あらあらしきののしりの声を聞きつけた。やがて細君さいくんも木戸きどへ顔をだして、きてくれという。いってみると、

兼吉かねきちと五郎ごろうがふたりして、花前はなまへを引きひきたてて牛舎ぎゆうしやからでるところであつた。

花前は、ややもすればふたりをはらいのけようとする。ふたりは、ひつしと花前の両手を片手かたてずつとらえて離はなさない。ふたりはとうとう花前を主人のまえに引きすえて訴うえる。兼吉かねきちは、

「わし、この氣ちがいに打うたれました、なぐり返かえそうと思つても、ひとりではとてもこの野郎やろうにかないません、五郎ごろうさんがおさえてくれなきや……わし、こんな氣ちがいといっしよにいるのはいやですから、ひまをいただきます」

「この若いわかものが、牛をたたいたから打ちました」

「わし、牛を打つたのではありません……」

主人しゆじんは、まあまあとことばしらずかにふたりを制せいした。秋のゆくとというさびしいこのごろ、無分別むぶんべつな若ものと気がいとのあらそいである。主人はおぼえず身みぶるいをした。花前はなまえは平然へいぜんたるもので、

「牛をたたくという法ほうはない」

こう語勢ごせい強くいつたきり、ふたたび口くちを開ひらかぬ。ふたりはしきりに気がいなどに打たれたりなんかされて、とてもいられないとわめく。

話をまとめてみると、兼吉かねきちが尿板にょうばんのうしろを通とおろうとすると、一頭とうの牛がうしろへさがって立つてるので通れないから、ただ平手ひらてで軽かるく牛のしりを打ったまでなのを、牛をだいじにする

えいじやないか、これで一ぱいやつてがまんしてくるさ、えいか」

けんきち ござろう

兼吉も五郎も主人に、おれがあやまるからといわれては口はあけない。酒代一枚でかれらはむぞうさにきげんを直した。水車の回転も止めずにすんだ。生業ということにかかわつていれば、うちもないことにも怖じ驚くばかばかしさを主人はふかく感じた。細君もでてきて、

「わたしほんとおどろきました、あのけたたましい声つたらないですもの、気がいがどんなことをしたかと思つて……ああそうでしたか、まあよかつた、それにしても花前はなんだかわたし、きみ 気味がわるくて……」

主人は細君のことばを打ち消して、

「花前の気ちがいぶりもわかつてるのだから、すこしも気味のわ
るいことはないよ、こんどのはどっちがどうかかわかりやし
ない、乳ちちしぼりが牛をだいにするといふのだから、たとえま
ちがつても憎にくくはないじゃないか」

細君は、

「そりやそうですがねい」

とまだふにおちかねたが、主人は、

「あんなにいかいかしいふうをしておつても、しりのぬけてるの
が、かわいそうに見えないか、ふびんをかけてやれ」

というのであつた。細君の去さつたあとで、主人は、おもしろいと

いうことのない花前がおこつたというのはおかしいなど考えたけれど、その理由は解釈がつかかなかつた。

はじめに花前に笑わせた下女は、おせつかいにも花前にぜひ象牙のはしの話をさせるといつて、いろいろしんせつに世話をしたり、話をしかけたりしたけれど、しろりと笑わせるのが精一ぱいで、それ以上にはなにごとをもえられなかつた。もう根がつきたと下女は笑つてる。

かくて水車はますますぶじに回転しいくうち、意外な滑稽劇が一家を笑わせ、石塊のごとき花前も漸次にこの家にならずんでくる。

ある日、主人のるすの日であつた。警視庁の技師が、ふいに

牛舎ぎゆうしやの検分けんぶんにきた。いきなり牛舎のまえに車にのりこんできて、すこぶる権柄けんべいに主人はいるかどどなつた。

兼吉かねきちと五郎ごろうは洗いあらものをしていゝ。花前はなまえが例れいの毅然きぜんたる態度たいどで技師先生ぎしのまえにでた。技師はむろん主人と見たので、いささかていねいに用むきを談だんずる。

花前はなまえはときどき頭あたまを動かすだけで一言ごんもものをいわない。技師先生ぎし心しんちゆう中ちゆう非常ひじょうに激高げっこう、なお二言三言、いつそう権柄けんべいに命めい令れいしたけれど、花前はなまえのことだから冷然れいぜんとして相手あいてにならない。

技師ぎしは激げきしているから花前はなまえの花前はなまえたるるところにいつこゝう気がつかない。技師ぎしはたまりかねたか、ここでは話わができないといつて玄げ関かんへまわつた。あらたまつてその無礼ぶれいを詰責きつせきするつもりであ

つたらしい。

玄関では細君さいくんがでて、ねんごろに主人ふざいの不在ふざいなことをいうて、たばこ盆ぼんなどをだした。技師もここで花前はなまへの花前はなまへたることを聞き、おおいにきまりわるくなって、むつかしい顔のしまつきゆうに究きゆうしたまま逃げ去さった。夜、主人しゅじんが帰かへつてから一家いっかくずるるばかり大笑おほいいをやった。兼吉かねきちと五郎ごろうは、かわりがわり技師ぎしと花前はなまへとの身みぶりをやって人を笑わらわせた。細君さいくんが花前はなまへを気味きみわるがるのも、まったくそのころから消きえた。

六

年が暮れて春がき、夏がきてまた秋がきた。花前もここに早
 一年おつてしまった。この間、花前かんの一身しんじょう上には、なんらの
 変化へんかもみとめえなかつた。ただ考かんえ性がな主人しゆうの頭には、花前かんのよ
 うに、きのうときようとの連絡れんらくもなく、もちろんきようとあす
 との連絡もない。まして一年とかひと月とかいう時間いの意味みのあ
 りようもなく、かれは生いきるために働はたらくのでなく、生きているか
 ら働くというような生活、きようというほかに時間の考えはなく、
 自分というほかに人じん生せいの考えはない。いやきようということも
 自分ということも意い識ししていやしない。

してみると、かれに義務ぎむ責せき任にんなどいう考えのありようもなけ
 れば、きようくつも心しん配ぱいも不安ふあんもないわけだ。明あるいところに魔ま

の住すまないごとく、花前はなまへのような生活には虚偽罪きよぎざいあく悪あくなどというも
 のの宿やどりようがない。大悟徹底だいごてつていというものがそれか。絶ぜつ対たい的てき安あ
 んしん
 心しんというものがそれか。むかしは、宰さい相しやうを辞じして人のために
 えん
 園えんにそそいだという話があるが、花前はなまへはそれに比ひすべき感がある。
 主人はまたこう考えた。かえりみて自分の生活を見ると、じつ
 になさけないとらわれの身みである。わずかに手てを動うごかすにも足あしを
 動かすにも、あとさきを考えねばならぬ。かりそめにものをいう
 にも、人の顔かおいろ色を見ねばならぬ。前後左右ぜんごさゆうに係累者けいるいしやはまとい
 ついてる。なにをひとつするにも、自分のみを標ひやう準じゆんとして動
 くことはできぬ。とうてい社会組織しやかいそしき上じやうの一分子ぶんしであるから、い
 かなる場合ばあいにも絶ぜつ対たい单たん独どくの行こう動どうはゆるされない。

それでつまりよいかげんなことばかりをやつて、まにあわせのことばかりいつておらねばならぬ。それというのも、義務とか責任とかいうことを、まじめに正直に考えておつたらば、實際人間の立つ瀬はない。手足を縛して水中におかれたとなんの変わるところもない。

このせつない羈絆を脱して、すこしでもかつてなことをやるとなつたらば、人間の仲間入りもできない罪悪者とならねばならぬ。考えれば考えるほどばかっているけれども、それをどうすることもできないのがわれわれの生活状態である。

こう思うと自分がどれだけ花前に勝っているか、いよいよわからなくなる。むしろどうか一度でもよいから花前のような生活

がしてみたくなつてくる。

要するに、自分を強く意識するのがわるいのだ。自分を強く意識するから、世の中がきゆうくつになる。主人はこんな結論をこしらえてみたけれど、すぐあとからあやふやになつてしまった。自分と花前との差別はどうかさへ、意識があるのとないのとのほかない。自分に意識がなければ自分はこのままでもすぐ花前になることができるとすれば、花前はけつしてうらやむべきでないのだ。

大悟徹底とは有と無との差である。花前は
大悟徹底の形であつて心ではなかつた。主人は
ようやく結論をえたのかかわらず、さらば自分の生

活にどれだけの価値があるかと思つてみて、やはりわけがわからなくなつた。花前と大悟徹底とは、裏表であるが、自分と大悟徹底とは千葉と東京との差であるように思われた。

ここ一、二年水害をまぬがれた庭は、去年より秋草がさかんである。花のさかりには、まだしばらくまがありそうだ。主人はけさも朝涼ちようりように庭を散歩する。すいれんの花を見て、去年花前がきたのも秋であつたことを思いだす。この日、主人は細君より花前の上について意外な消息しよくそくを聞いた。

花前は、けさ民子たみこをだいてしばらくあるいておつた。細君はもちろん、若衆わかしゆうをはじめ下女げじよまでいつせいにふしぎがつたとの話である。それは實際じつさいふしぎに相違そういない。これまでの花前にし

て、子どもをだいてみるなどは、どうしても破天荒なできごとといわねばならぬ。

下女の話によると、タアちゃんは今までもときどき、花前、花前といつて花前のところへいき、花前もタアちゃんの持つていったお菓子を食べたようすであつたという。主人はこの話を非常な興味をもつて聞いた。今後花前の上になんらかの變化をきたすこともやと思わないわけにはいかなかつた。

その後自分も注意し家のもの話にも注意してみると、花前
 はかならず一度ぐらいつつ民子をだいてみる。民子もますます花
 前、花前といつてへやへ遊びにゆく。花前は、ついに自分で菓
 子など買うてきて、民子にやるようになった。ときにはさびしい

笑いわらいようをして、タアちゃんと言ことくらしいよぶのであつた。そう
 思つて見ると、花前の毅然きぜんとした顔つきが、このごろは、いくら
 かやわらいできたようにも見える。若わか衆しゆうの話では、花前は近ちか
 ごろ元氣がおとろえたようだという。それでもその水車すいしやてきうん的運ど
 動うにはまだすこしも變かわるところはなかつた。

それからひと月ばかり花前の新傾しんけい向こうはさしたる発はつてん展てんもなく
 秋もようやく涼すずしくなつた。

七

花前の友ゆうじん人じんという人が、とつぜんたずねてきて、花前の身みぶん分ぶんが

ようやく明らかになつた。

友人というのは、某会社ぼうかいしゃの理事安藤某あんどうぼうという名刺めいしをだして、年ごろ四十五、六、洋服ようふくの風采堂ふうさいどうどうとしたる紳士しんしであつた。主人は懇切こんせつに奥おくに招しょうじて、花前はなまへの一身しんにつき、問といもし語かたりもした。

安藤はなしは話の口があくと、まず自分が一年まえに会あつたときと、きよう会つた花前はなまへはよほど變かわつてゐる。自分は十代だいから花前はなまへと懇意こんいであつて、花前はなまへにはひとかたならず世話せわにもなつたが、自分も花前はなまへのためにはさうとう以上いじょうにつくした。いまのような境きよう遇ぐうになつて、だれひとりおとのうてなぐさめるものもないうちに、自分だけはたえず見舞みもうておつた。

その自分に対して、去年会うたときには、某牛舎に寝ておつて、うん安藤かといつたきり、おきもしなかつた。それがきようは、意外に自分を見るとうれしそうに立ちあがつて、よくきてくれたといつた。じつは自分は花前はもうだめとあきらめていたところ、きようのようすでは精神の状態が、たしかにすこしよくなつてる。この家へきたときからこのくらいか、あるいはいつごろから調子がよくなつたかと問うのであつた。安藤は眞の花前の友である。

主人は花前が近來の変化のありのままを語つたのち、今後あるいは意外の回復をみるかもしれぬと注意した。安藤はもちろん見込みがありさえすれば、すぐにも自分が引き取つて治療を

こころみんなとの決けつ心しんを語り、つづいて花前の不幸ふこうなりし十年ま
えの経けい歴れきを語かたつた。

花前は麻布某所あざぶぼうしよに中ちゆう等とうの牛乳屋ぎゆうにゆうやをしておつた。畜ちくさ
産熱心家ねつしんかで見職けんしきも高く、同業間どうぎようかんにも推すい重ちゆうされてお
つた。母がひとり子ども三人、夫婦ふうふをあわせて六人の家族かぞく、妻さい
君くんというのは、同業者のむすめで花前の恋女房こいにようぼうであつた。
地所じしよなどもすこしは所有しよゆうしておつて、六人の家族は豊ゆたかにたの
しく生活しておつた。

それ以前いぜんから、安藤あんどうは某学校ぼうがっこうの学費がくひまで補助ほじよしてもらい、
無二むにの親友しんゆうとして交際こうさいしておつたのだが、安藤がいまの会社
へはいつて二年めの春、母なる人がなくなり、つづいて花前の家

にはたえまなき不幸をかさねた。

その秋の赤痢流行のさい、親子五人ひとりものこらず赤痢

をやった。とうとう妻と子ども三人とはひと月ばかりのあいだに

死亡し、花前は病院にあってそれを知らないくらいであった。

そんな状況であるから、営業どころの騒ぎでない。自

分が熱心奔走してようやく営業は人にゆずりわたした。

花前は二か月あまりも病院におつていつまで話さずにおくわけに

ゆかないから、すべてのことを話すと、

「破壊しおわった断片の一個をのこしてどうするものか、このこ

つたおれだつてこまる、のこされた社会もこまるだろう、この一

個の断片をどうにかしてくれ、おれはどうしてもこの病院をで

ない」と絶ぜつきよう叫きようして泣いたけれど命めいすう数があれば死しにも死なれないで、花前は追おわれるように病院をでた。病院をでてでもいく家はない。待まってる人もない。安藤が自分の家へつれて帰ったものの、慰藉いしやのあたえようもない。花前はときどき相手あいてかまわず、「どうせばえいんだ」とどなる。

安藤は手のつけようがないから、ともかくも湯ゆ河原がわらへつれだした。そうして自分もいっしょにひと月もおつてなぐさめた。どうかして宗しゆう教きやうにはいらしめようとこころみたが、多た少しやう理り屈くつの頭があつたから、どうしても信しん仰かうにはいることができない。破壊はかい以前いぜんが人なみよりもあたたかいはかい歓かん楽らくに富とんでおつただけ、

破壊後の悲惨が深刻であつた。

自分もそうそういっしよにはおられないので帰京すると、花
なまえ

前はそのまま一年半もその家におつた。あつただけの財をこと

ごとく消費して、ただ帰京の汽車賃で安藤の家に帰つてきた。

そのときにはたしかに精神に異状を呈しておつた。なにを話

してみようもなく、花前は口をきかなかつた。

その後無断で安藤の家をでて、以前交際した家に乳しぼりを

しておつた。ようやく見つけてたずねていくと、いつのまにかい

なくなる。また見つけだしてたずねると、またいなくなる。ゆく

さきざきの乳屋で虐待されて、ますます本物になつたらし

い。じつにきのどくというて、このくらい悲惨なことはすくなくな

ろうと、安藤は長ながと話しおわって嘆息たんそくした。

主人もことばのかぎりをつくして同情どうじょうした。しんせつな安藤はともかくも治療ちりょうの見込みみこがすこしでもあるならば、一日も見てはいられぬといって辞じし去さった。

安藤は去さつてから三日くるまめに、車くるまを用意じしんして自身じしんむかえにきた。

花前は安藤のいうことをこばまなかつた。いよいよ家をでるときには主人にも、ややひととおりのあいさつをして、厚意こういを謝しゃした。
 台所だいどころへでて、無言むごんに夕アちゃんをだいたときには、家のもの
 みなが目めをうるおした。花前はなまえが去さつたあと、あのはしの話を聞ききたかっただけけれど、なんだかきのどくで聞かれなかつたと下女げじよも

涙なみだをふいた。

十日かほどたつて、主人は花前を青山の脳のう病院びょういんにおとのうてみた。花前は非ひ常じょうによるこんだ。話しするところによると精せい神んのほうはますますよいようであるが、それと反はん比ひ例れいにからだのほうはたいへん疲つかれてるように見えた。それから二十日ばかりして、花前は死しんだと安藤から知らせてきた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月4刷

初出：「ホト、ギス 第十三卷第一號」

1909（明治42）年10月1日

※表題は底本では、「箸《はし》」となっています。

※「兼吉」に対するルビの「かねきち」と「けんきち」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年9月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

箸
伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>